

第3章 ファカルティレッド・プログラム (FL) ---

本章では、スタディ・アブロード・プログラム（以下、SAP）に次ぐ新しいプログラムとして、2016年度より開発・実施している2週間の教員引率型ファカルティレッド・プログラム（以下、FL）について紹介します。FLを開発するに至った経緯、プログラムの目的や特徴、2018年度前期までに実施したプログラムの内容やこれまでの成果報告、また、実際にプログラムを担当した教員へのインタビュー結果をまとめ、FLの教育的意義を明らかにします。さらに、FLを普及・発展させるために、グローバルラーニングセンターが中心となり作成した「FLガイドライン」に沿って、プログラムの開発や改善における留意事項を紹介し、大学生向け教員引率型プログラムを開発・改善しようとしている方たちの参考となるような資料を提示します。

1. FLプログラム開発の経緯

2011年よりグローバルラーニングセンターが中心となり実施してきたSAPが軌道に乗り、参加者が年間300名を越えた2015年頃、ある変化が起き始めました。それまで大学が全額を負担していた、SAPの授業料にあたるプログラム費が軒並み上昇しました。世界規模で留学の短期化が進み、需要が高まりつつあったため、これを商機ととらえた海外の大学が、価格の見直しを行ったためです。本学では、既に大学の運営費交付金の経年削減や、経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（文部科学省：2012年～2016年）終了の影響を懸念し、プログラム費の一部を参加者負担とする対策案を固めた矢先の話でした。学生負担導入分が、プログラム費の値上げにそのまま吸収されてしまうため、大学の台所事情は苦しいままでした。

また、中東から世界に広がったテロ活動の活発化、米国の銃乱射事件、アジアで相次ぐ自然災害など、海外研修の向かい風もこのころ特に強くなり始めていました。海外留学に対して、学生のみならず、保護者も不安を抱きはじめ、家族の了解が得られないと相談に来る学生もいました。

学内においても、長期休暇期間に集中講義や特別セミナーが開講されるケースが増え、参加したいプログラムと物理的に参加可能なプログラムの不一致で、参加に至らない学生が散見されるようになりました。学生の大学入学前の国際経験も変化しつつありました。近年は、中学や高校で、海外研修やホームステイなどを経験する学生が増え、海外初心者向けのSAPでは少し物足りないと感じる学生が出始めていたのです。このような状況が少なからず影響したのか、SAPの申請者数が鈍化し始めたのが2015年でした。大学は、学生の多様化するニーズを鑑み、SAPに次ぐ、質の高いプログラムを、大学と学生の財政負担をなるべく抑えながら開発する必要に迫られていました。

2. FLプログラムの定義・目的

そこで、語学研修・異文化理解教育を中心に組み立てられているSAPよりも、テーマ性や専門性が高く、短期間に集中して研鑽に臨める教員引率型プログラムの開発に着手しました。本学が学術間交流協定を結ぶ大学、もしくはそれに準ずる機関において、引率する教員の指導のもと、プログラムごとに定められたテーマに沿った学習を2週間、みっちり行うのがこのFLの特徴です。この教員引率型のプログラムは、20年ほど前から北米で普及し始め、豪州でも近年、急速に発展しつつあります。本学の協定校でもある米国ミシガン州立大学は「FL発祥の地」として知られ、年間、2500人の学生を教員引率型プログラムで全世界に送り出しています。このため、プログラム開発・実施を支援するシステムや、履修上の様々な制度が整っている他、プログラムの質保証についても単位付与とあわせ、整備が行き届いています。

実は本学でも、以前、一部の全学教育初修外国語担当教員を中心に、1週間程度の海外研修プログラムを試行的に実施したことがありました。しかし、優良プログラムに紛れて、旅行会社に企画を全委託した結果、担当教員の意に沿わない観光を目的とした研修旅行が含まれるようになり、プログラムも単位化されていたわけではないので、結局は継続実施に至らなかった過去があります。同じ轍を踏まないためにも、FL

を開発するにあたり、グローバルラーニングセンターで海外短期研修プログラムの開発・実施を統括する立場にあった筆者が、FL プログラムを統括し、質の担保に留意しながら、持続可能なプログラムの開発に着手することになりました。SAP 同様、現地研修と連動した事前・事後研修を取り入れ、学修時間に応じた単位付与が行えるよう、制度設計に注力し、プログラム担当教員の専門性や現地文化に対する精通を最大限生かせるように工夫しました。参加者の学びの質、つまり学習成果を高めるために、研修テーマ、教育内容、フィールドワークの形態および場所、教育介入など、担当者の裁量に配慮し、それぞれの教育理念に基づいたカリキュラムを組むことが、FL プログラム開発の鍵となります。

テーマに沿ったカリキュラムを、現地協力者との協働によりデザインするのはプログラム担当者ですが、当然、FL 全体の共通目標も設定しなければなりません。専門家による現地セミナー、フィールドワーク、語学・文化研修、現地学生との協働学習や交流活動を通して、学生がテーマを掘り下げて学習できる機会を作ることが FL を成功させるための最重要ポイントとなります。座学では学べない、フィールドワーク活動を通じた知識の習得や、異国・異文化への理解深化、またそれらを踏まえた自文化やアイデンティティの再考を、新たな価値観の創造につなげる場の創出も FL の重要な目標です。たった二週間で、そのような深い学びを導き出すことが出来るのか、と思われる方がいるかもしれません。しかし、詳しくは後述しますが、入念な事前研修と、現地研修中の引率教員の継続的なファシリテーション、事後研修での学習体験に対する内省・総括が出来れば、2 週間の海外体験でも十分な効果が得られます。

開始当初は、学生のみならず、教職員からも SAP との違いが分かりづらいと指摘されることがありました。確かに FL の中にも様々なプログラムが存在し、中には一見、SAP と類似した教育内容のものも含まれています。このため、教員が引率するという明確な相違点以外の特徴が見えづらいという意見はもっともでした。しかし、実際、SAP 参加経験のある FL 参加者に感想を聞くと、ほとんどの学生が「全く違う」と答えます。既存のプログラムとの差別化を図り、参加前の学生や関係

者に理解してもらうために、カリキュラムのみならず、引率教員の役割や教育介入について可視化を図る必要があります。東北大学の場合は、SAPが「言語や文化を学ぶ」ことを目的とし、FLは「言語を用いてテーマ学習をする」プログラムであることを強調するようにしています。つまり、FL参加者には、ある程度、ターゲット言語を用いて他者と意見交換や協働学習・交流が出来る能力と意欲が備わっていることを期待しています。このため、応募時点で、一定の語学力や言語の既習歴を条件として課しているプログラムもあります。

SAP同様、短期研修参加を契機に、より長期の海外留学に関心を持ってもらうこともFL実施の目的なので、プログラム担当者には、大学としてのFLの位置づけを事前に説明し、理解を得ています。大学の国際教育交流における理念や戦略を全ての教員が100パーセント理解しているわけではないため、開発前にしっかりと意見交換をして意思疎通を図っておく必要があります。引率時の指導においても、東北大学のFLでは、「海外で自立した学習者として長期間滞在できるように仕向けて行く」ことを意識して欲しいと担当教員には伝えてあります。FL全体を通した目標と、各担当教員が設定するそれぞれのプログラムの目標を整合させつつ、他のプログラムとの差別化を図ることが可視化の第一歩になります。

3. FLプログラムの概要

SAP同様、FLも夏季・春季休暇期間中に実施する海外現地研修と、東北大学で行う事前・事後研修を一体化させ、2単位を付与する全学教育科目「海外研修（展開）」として開講しています。単位を付与することにより、本学の教育プログラムに相応しい内容や修学時間数を担保し、質の維持及び向上に努めています。また、単位付与は、学生にとっても参加のインセンティブになりますし、毎年、プログラム単位で申請する日本学生支援機構の海外留学支援制度による給付型奨学金を受給できる可能性も増えます。この奨学金が、単位の伴う海外研修のみを支給対象としているためです。

他の科目同様、「海外研修(展開)」でも、全ての研修における学習活動・成果を総合的に勘案して、プログラム担当教員が成績を AA～D で評価しています。引率教員が、現地で学生の学びに直接深く関わり、派遣先の教員とも成績評価について意見交換が出来るため、評価は通常の授業と変わりません。履修登録については、派遣候補者の決定が、プログラム選考結果後の6月(前期)もしくは11月(後期)にずれ込むため、教務上は「短期集中講義」として開講し、履修登録は大学で一括して行っています。東北大学グローバルリーダー育成プログラムの海外研鑽サブプログラムとして認定されていることも、FL研修の質保証や参加学生のモチベーションにつながっています。

2016年の開始初年度は、ドイツ、スペインの2プログラムのみでしたが、2017年度は夏季休業期間中に、カナダとアメリカ・シャーロット、春季にドイツ、スペイン、ロシアと5プログラムに増やしました。また、2018年度は、夏にもう1プログラム(アメリカ・モンタナ)、春にも1プログラム(オーストラリア・メルボルン)を追加し、計7プログラムに発展させることが出来ました。定員は、各プログラムにより異なりますが、派遣先の提示する実施条件に受入数が定められているケースもあります。例えば、モンタナやメルボルンはプログラム実施における費用対効果を考えると、20名以下の実施は厳しいと、プログラム開発時点でプログラム催行条件が提示されました。大学がその多くを負担するプログラム費をなるべく抑えるために、東北大学サイドの担当教員が交渉を重ね、低価格で受入を受諾してもらっているため、派遣先の費用対効果にも配慮する必要があるのです。

3.1. 2018年のFLプログラム

2018年度に実施するプログラムの概要を、プログラム名、派遣先、定員、現地研修期間、対象者、応募条件、宿泊施設、費用、特色ある教育内容、プログラム担当教員名、所属部署別にまとめたものが以下となります。グローバルラーニングセンター(担当教員(以下、同じ):ロベール、末松)のみならず、同機構内の言語文化教育センター(シルバ、ス

プリング、メレス)、また国際連携推進機構(米澤、三隅、徳田)と、複数の組織の担当教員が関わる形で実施しています。さらに、2017年より、経済学部にもノウハウを伝授し、類似の教員引率型短期研修がベトナム・ハノイで実施されています。そもそも、第二の海外研修プログラムとしてFLを検討し始めた時に、米国並にプログラムを発展させるためには、まずはグローバルラーニングセンターでモデル・プログラムを開発し、その方法を、他部署、他学部へ伝授する形で、拡大を図らなければ持続的発展は難しいであろう、と結論づけていました。そのため、SAP関連の事務作業は学生支援部留学生課が担当していますが、FLは民間企業に業務を委託する産学連携モデルにしました。短期海外研修にかかる事務作業を留学生課のようにこなせない部局でも、民間企業を活用することにより、プログラムの遂行が可能であるというメッセージを前面に押し出す必要があったからです。

表1. 2018年度夏季FLプログラム

	カナダコース	シャーロットコース	モンタナコース
プログラム名	Tohoku CHaNGE summer program 2018 Canadian Heritage and Nature Group Experience	ノースカロライナで学ぶアメリカ南部の歴史とサバカルチャー	Exploring Models of Sustainability In "Big Sky Country" "ビックスカイカントリー (モンタナ州)" にあける持続可能性を探ろう
派遣先	マギル大学、オタワ大学 他	ノースカロライナ大学シャーロット校 他	モンタナ大学 他
派遣人数	14名	16名	20名
実施期間(予定)	日本出発日 9月15日(土) 日本帰国日 9月30日(日) 16日間	日本出発日 8月28日(火) 日本帰国日 9月13日(木) 17日間	日本出発日 9月11日(火) 日本帰国日 9月24日(月) 14日間
参加対象	全学対象(学部生優先)	全学対象(学部生優先)	全学対象(学部生優先)
語学要件	有り(TOEFL-ITP@スコア500以上)	無し	無し
滞在形態	学生向け宿泊施設、ロッジ 等	学生向け宿泊施設 等	学生向け宿泊施設 等
参加費用(奨学金)	25~30万円程度 (航空券、プログラム費、滞在費、海外保険等) ◆食費、現地交通費等は別途必要になります。 ◆8万円の奨学金を支給予定。	25~30万円程度 (航空券、プログラム費、滞在費、海外保険等) ◆食費、現地交通費等は別途必要になります。 ◆8万円の奨学金を支給予定。	25~30万円程度 (航空券、プログラム費、滞在費、海外保険等) ◆食費、現地交通費等は別途必要になります。 ◆8万円の奨学金を支給予定。
現地研修内容(予定)	<p>⇒東北大学生のために特別に開発されたプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> Experience and learn about Canadian history, culture, but also its environment and nature. Explore Montreal's and Ottawa's historical sites and natural environment thematic museums. Use and improve your English skills (and French too, if you want). Enjoy an educational stay in a pristine natural reserve (exploration of local flora and fauna). Learn and develop awareness about key environmental and climate change issues. <p>カナダの大学で歴史、文化、環境や温暖化について学ぶ ・モントリオールとオタワの二つの都市で体験 ・2か国語の環境で体験 ・カナダの大自然の中のロッジで2泊3日の体験 カナダのアートや食文化の中心モントリオールでの学習</p> 	<p>⇒東北大学生のために特別に開発されたプログラム</p> <p>英語学習や普段はあまり知られていないアメリカの文化等の学習を通して自分の属する文化やアイデンティティについて考えることをテーマとしています。</p> <p>尚、研修には以下の多彩な活動が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーションとスピーキングを中心とした英語学習 ・現地学生との交流イベント ・アメリカの様々なサバカルチャーの研修 ⇒アメリカ南部の特色ある文化 ⇒アフリカン・アメリカンの歴史と文化 ⇒先住民(インディアン)との生活と文化 ・先住民の保留地、史跡、博物館などへのフィールドワーク <p>自分自身や自国のサバカルチャーやアイデンティティを再考するプログラムです。 アメリカを見るのではなく「体感」しましょう!</p> 	<p>⇒東北大学生のために特別に開発されたプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Better Understanding the Environment and Climate Change through the Lenses of your Roles as Global Citizens. ・Experiencing American Culture and Using your 4 Skills of English in Nature-rich Montana ・1000種類以上の動植物が生息している壮大なグレイシャー国立公園やかつての炭鉱を見学し、美しいモンタナの大自然の中で環境、気象について英語で学びまたコミュニケーション力を高める。ロッキー山脈の圧倒的迫力を実感!!! ・世界的にも有名な世界最大の恐竜化石コレクションを誇るロッキー山脈博物館で生態学に触れ、ネイティブアメリカンの歴史と文化を学ぶ。 ・現地大学生と一緒に生きた英語でアウトドアやアメリカンフットボールの観戦などアメリカでしかできないことを満喫。 

表2. 2018年度春季FLプログラム

	スペインコース	ロシアコース	オーストラリアコース	ドイツコース
テーマ	マドリドで学ぶ スペイン語とスペイン文化	見て、聞いて、話して深める 日露相互理解	メルボルンで学ぶ 文化的多様性と多文化社会	課題解決型のフィールドワーク を通してドイツに学ぶ
派遣先	スペイン・マドリド 他	ロシア・モスクワ 他	オーストラリア・メルボルン 他	ドイツ・バグホーン 他
派遣人数 (予定)	14名	15名	20名	14名
実施期間	日本出発日 2月10日(日) 日本帰国日 2月24日(日) 15日間	日本出発日 2月20日(水) 日本帰国日 3月7日(木) 16日間	日本出発日 2月24日(日) 日本帰国日 3月9日(土) 14日間	日本出発日 3月10日(日) 日本帰国日 3月24日(日) 15日間
参加対象	全学部生、大学院生 (学部生優先)	学部1、2年生 日本国籍または日本永住者	全学部生、大学院生 (学部生優先)	全学部生、大学院生 (学部生優先)
履修要件	有り (スペイン語学習履歴があること)	有り (TOEFL、IELTS、TOEIC受験経験者)	無し (TOEFL-ITP®スコア500以上が望ましい)	無し (TOEFL-ITP®スコア500以上が望ましい)
滞在形態	学生寮	学生寮	ホテル	ホテル
参加費用 奨学金	25～30万円程度 (航空券、JTB®5日課、 滞在費、海外保険等) ◆食費、現地交通費等は別途必 要になります。 ◆8万円の奨学金を支給予定。	7～10万円程度 (JTB®5日課、滞在費、 海外保険等) ◆食費、現地交通費等は別途必 要になります。 ◆10万円の奨学金を支給予定。	25～30万円程度 (航空券、JTB®5日課、 滞在費、海外保険等) ◆食費、現地交通費等は別途必 要になります。 ◆7万円の奨学金を支給予定。	25～30万円程度 (航空券、JTB®5日課、 滞在費、海外保険等) ◆食費、現地交通費等は別途必 要になります。 ◆8万円の奨学金を支給予定。
現地 研修 内容 (予定)	<ul style="list-style-type: none"> 参加学生の希望や意欲を反映させたプログラムとなります。 午前は語学研修、午後は文化を学ぶ場所でのフィールドワークを実施。 マドリド市内の文化施設訪問や世界遺産の街トレド、歴史的遺産の多ルセゴビア(予定)へのフィールドトリップを実施する。 現地学生との交流や日本文化の紹介を行う。 スペインに関するテーマについて調査し、プレゼンテーションを行う。 担当引率教員： 高麗教養教育・学生支援機構 セシリア・シルバ 准教授	<ul style="list-style-type: none"> ロシアの名門大学であるモスクワ国立大学でロシア語、ロシア文化などを学ぶ。 現地学生に対して、日本、東北・仙台、東北大学について紹介する。 独立非営利法人「日本センター」を訪問し、学生および社会人日本語学習者との交流会に参加する。 日本の外郭団体モスクワ事務所を訪問し、日露交流の意義と重要性について学ぶ。 現地での研修、現地学生とのプロジェクトを通して情報発信と情報発信力について学ぶ。 モスクワ市内の文化施設や世界遺産へのフィールドトリップ。 ロシアの劇形式「ウー祭り」でロシア文化を体験する。 担当引率教員： 国際連携推進機構 ロシア交流推進室 徳田 由佳子 特任助教 国際連携推進機構 国際連携推進室 三隅 多恵子 特任准教授	<ul style="list-style-type: none"> オーストラリアの多文化主義による多文化社会を肌で感じ、未来の日本の多文化社会を考えるプログラム。 「多文化」をテーマに、参加者がグループで個別のトピックに沿って探究する。 講義では、メルボルン大学の講義と現地で活躍する日本人から、多文化社会での学びや海外で生活することについての知見を得る。 メルボルンの市内および郊外でのフィールドワークを実施する。 ディスカッションやプレゼンテーションなどにおけるアカデミックな場面の英語レッスンが含まれる。 現地学生との交流やプロジェクト指導がある。 現地の教員や学生に東北大学を紹介するプレゼンテーションを行う。 担当引率教員： 国際連携推進機構 高麗教養教育・学生支援機構 米澤 由苗子 准教授	<ul style="list-style-type: none"> ドイツ国内の複数都市でプロジェクト型協働フィールドワークを行う。 「ドイツと移民」をテーマに、参加者がそれぞれの関心に沿ったサテライトを設け、バグホーン大学の学生と一緒に課題解決型学習に取り組む。 バグホーン大学でドイツ語、ドイツ文化、移民政策について学ぶ。 その他ドイツの名門大学であるグツテニング大学、ケルン、ベルリンでフィールドワークや文化体験を行う。 ドイツの移民や移民支援団体へのインタビューを通して、教科書では学べないリアルなドイツの現状を知る。 現地学生と「Culture Night」を企画し、大学関係者や地域の人々との交流を深める。 東北大学の紹介やプロジェクトの成果報告などプレゼンテーションを行う。 協働プロジェクトを通して、国・専門・学年を超えた人的ネットワークを形成する。 担当引率教員： 高麗教養教育・学生支援機構 末松 和子 教授

3.2. カリキュラム

各プログラムとも、担当教員と現地協力者が1年近くかけて開発し、2年日以降は、前年度のプログラムの反省点を踏まえ、改善を重ねて作り上げています。当然ながら、教育内容は洗練され、実施体制や現地協力者とのネットワークもより整備されます。これがプログラムの質の向上につながっています。現地での研修に担当教員が深く関わり、FLの全体像を俯瞰しつつ効果検証に携わることが出来るため、まさにPDCAを繰り返しながら完成度を高めて行けるのがFLの強みだと言えます。

2018年度に3年目を迎える筆者担当のドイツ・プログラムのカリキュラムを参考までに紹介しましょう。

表3. 2018年度FLプログラム(ドイツ・プログラム)

	SUN	MON	TUE	WED	THUR	FRI	SAT
	3月10日	3月11日	3月12日	3月13日	3月14日	3月15日	3月16日
9:00	Departure (Haneda) Arrival (Frankfurt) Frankfurt → Paderborn by bus 羽田発 フランクフルト着 バスでパダーボーンに移動	Check in	Lecture セミナー	Seminar & Interview (City/Organization)	Seminar & Interview (City/Organization)	ゲッティンゲンへ移動(鉄道) Study tour at Cologne Cathedral ケルン大聖堂スタ ディツアー	ケルンへ移動(鉄道) Study tour at Cologne Cathedral ケルン大聖堂スタ ディツアー
10:00		Welcome by UPB オリエンテーション		Seminar & Interview (City/Organization)	Seminar & Interview (City/Organization)		Lecture セミナー
11:00		Icebreaking アイスブレイキング	Lunch				
12:00		Campus tour キャンパスツアー		Language ドイツ語	Language ドイツ語		Language ドイツ語
13:00		Lunch	Project Preparation				
14:00		Univ presentation by students 学生による大学紹介		Intercultur Get Together パダーボーン学 生との交流会	Free time 自由時間(グループ活動) 交流活動		
15:00		City Tour シティツアー	Welcome Party 歓迎会				Cologne ケルン泊
16:00		Project Preparation		Project Preparation	Project Preparation		
17:00		Project Preparation	Project Preparation				Project Preparation
18:00		Project Preparation		Project Preparation	Project Preparation		
19:00	Project Preparation	Project Preparation	Project Preparation				
20:00	Project Preparation			Project Preparation	Project Preparation		
Lodging	PB Station Hotel	PB Station Hotel	PB Station Hotel			PB Station Hotel	PB Station Hotel

	3月17日	3月18日	3月19日	3月20日	3月21日	3月22日	3月23日	3月24日
9:00	Move to Duisburg	Study tour in Berlin ベルリン・スタディ ツアー	Study tour in Berlin ベルリン・スタディ ツアー	Study tour in Berlin ベルリン・スタディ ツアー	Preparation for presentation 最終プレゼン準備	Final Presentation 最終プレゼン	Free time	Arrival (Haneda) 羽田空港
10:00	Visit to Mosque トルコ移民モスク訪問				Interview with immigrants 移民インタビュー			
11:00		Project Preparation プロジェクト	Move to PB パ ダーボーンへ移動(鉄道)	Free time		Culture Night カルチャーナイト		
12:00	Project Preparation				Move to PB パ ダーボーンへ移動(鉄道)		Free time	
13:00		Project Preparation	Move to PB パ ダーボーンへ移動(鉄道)	Free time		Culture Night カルチャーナイト		
14:00	Project Preparation				Move to PB パ ダーボーンへ移動(鉄道)		Free time	
15:00		Project Preparation	Move to PB パ ダーボーンへ移動(鉄道)	Free time		Culture Night カルチャーナイト		
16:00	Project Preparation				Move to PB パ ダーボーンへ移動(鉄道)		Free time	
17:00		Project Preparation	Move to PB パ ダーボーンへ移動(鉄道)	Free time		Culture Night カルチャーナイト		
18:00	Project Preparation				Move to PB パ ダーボーンへ移動(鉄道)		Free time	
19:00		Project Preparation	Move to PB パ ダーボーンへ移動(鉄道)	Free time		Culture Night カルチャーナイト		
20:00	Project Preparation				Move to PB パ ダーボーンへ移動(鉄道)		Free time	Culture Night カルチャーナイト
Lodging		Berlin IBIS Hotel	Berlin IBIS Hotel	Berlin IBIS Hotel		PB Station Hotel		

このプログラムは、現地の協力大学と共同開講しており、プロジェクトを取り入れた課題解決型学習を中心に組み立てられています。海を越えた日独学生チームを編成し、各チームがサブテーマを決め、現地研修の3ヶ月前から課題に取り組みます。「移民問題」をテーマに、学生が取り組むサブテーマ（経済、政治・政策、教育・福祉、地域）に関連したセミナー、関係者へのインタビュー、社会調査法に関するワークショップ、フィールドワーク（移民へのインタビュー含む）、関連施設の訪問、現地での生活に必要な最低限のサバイバル・ドイツ語、プロジェクトワーク、合同企画する地域社会向け文化交流イベントをこなしながら、2週間を駆け抜けるカリキュラムで、自由時間はほとんどありません。宿泊施設に戻る20時以降も、次の日の発表やインタビューに備えグループ学習や自習を行う学生もおり、まさに短期集中という言葉が相応しい研修になっています。派遣先の大学でも本カリキュラムに沿った科目が開講されており、本学の学生がドイツ語を学習する時間帯は、ドイツ人学生向けの日本語講座に置き換えられます。研修先の大学でも、日本への留学生を増やしたいため、この短期研修プログラムを動機付けに使っています。実際、過去2年間にわたり、このプログラムに参加した学生が本学への交換留学を果たしました。

学習以外でも、最終日に現地の関係者や日本留学に関心を持つドイツ人学生を招いて開催する文化交流イベント、「カルチャー・ナイト」の企画・実施を、両国の学生が別の3つのプロジェクトチームを編成して行います。「運営チーム」は全体の企画や準備の進捗を把握・援助し、それぞれの大学紹介等の冒頭部分を含めた全体のMCを担当します。「パフォーマンス・チーム」は、イベントで実施する学生による歌やダンス等のパフォーマンス以外にも、書道や折り紙などの文化を紹介する活動を企画・実施します。「フード・チーム」は、イベントで提供する食べ物や飲み物の準備をします。焼き鳥や蕎麦などの和食を極力、現地の食材を用いて調理・提供するためのメニュー作りや、食材調達を現地学生の助けを借りながら行い、当日は会場に併設されたキッチンを借りて準備を行います。この課外活動チームは、敢えて、学習プロジェクトチー

ムとは異なる編成とし、新たなチームメイトと協働することで、ネットワークの多様化が図れるようなデザインにしています。

4. FLの開発および実施

次にFLを開発・実施する際の手順です。前述のとおり、SAPと大きく異なる点は、事務手続きの大部分を大学外の民間企業に委託していることです。既に他大学では、民間企業への業務委託が進んでいますが、本学のように少し保守的な大学は、委託に踏み切るまで時間がかかります。業務委託を導入する場合は、それぞれの業務に関わるステークホルダーとその役割分担を確認しておくといでしょう。以下に、本学の例を参考までに示します。

実施体制

- 監督者 (FL 統括)
プログラム全体の管理・運営を統括し、プログラムの質保証、効果検証およびプログラム実施・開発に関する助言を担当。
- 実施責任者 (FL コーディネーター)
監督者との連携のもと¹⁾ 担当教員によるプログラム開発・実施を補助し、派遣 (短期) ユニット会議への報告等を担当。
- 担当教員 (プログラム担当者)
自身の専門・経験・海外ネットワークを活用し、プログラムを開発し、事前・現地 (引率) ・事後研修および報告会を取りまとめる。派遣先機関、監督者、実施責任者、実務担当と連携しプログラムを実施。
- 留学生課
監督者、実施責任者、担当教員、実務担当と連携のもと、契約・支

1) グローバルラーニングセンターでは、学生の海外留学 (派遣) に関する運営上の諸事項を、半年以上の交換留学については「派遣 (交換) ユニット」で、SAP や FL のような短期研修については「派遣 (短期) ユニット」で協議している。大学の方針や派遣留学の制度設計に関わる案件は、各ユニットから、全学委員会の「短期派遣留学実施委員会」に上げ審議する体制を取っている。

払、募集にかかる書類、学内周知、JASSO 等奨学金、海外旅行保険・J-TAS に関して、役割分担に基づき FL 実施を支援。

- 実務担当（民間委託企業）

委託内容に従い、監督者、実施責任者、担当教員、留学生課と相談のもと、プログラム実施にかかる業務（説明会等の広報活動、学生の問い合わせ対応、派遣先機関との契約業務、応募書類受付、合格者への通知、各種必要書類の回収、旅行手配等）を担当。

上記のように、細かく守備範囲を決めていても、プログラムを走らせるうちに業務領域の境界線が見えなくなってくるのが度々起こります。また、想定しなかった業務も発生するため、その都度立ち止まって、誰が「隙間仕事」を拾うのか、協議しなければなりません。複数のプログラムが同時に進むので、最初は混乱が起きます。その際、仕事を押しつけ合うよりも、プログラムを成功させるために、参加する学生の利益を最大限に優先して、お互い助け合うという姿勢を、関係者全員で共有しておくといよいでしょう。

4.1. プログラム開発

教育プログラムとして質を担保するために、開発にあたり、留意事項やプロセスを本学ではガイドラインにまとめています。そのうち、一部を以下に示します。

1) プログラムの質を保証するための確認事項

- 本学の協定校および同等の教育水準の高い機関の担当者と本学の担当教員が共同で開発し実施するものであること。
- 担当教員の責任において学習者の達成目標や習熟度を考慮したカリキュラムが設計されていること。
- 事前研修、事後研修を含め 2 単位の付与に値する教育活動が含まれている（目安：講義30時間相当）こと。うち、10日以上 の現地研修（到着日、出国日、休日を除く学習・活動日の総日数）が担保されていること。

- 現地研修と連動した4回以上の事前研修（危機管理含む）、1回以上の事後研修、事後報告会が含まれていること。
- 派遣先機関と連携しながら、担当教員が専門や経験に基づいた講義・セミナー・フィールドワークなどの学習指導を継続して行い参加学生の学びを深める仕組みが担保されていること。
- 現地研修において、学生や地域住民との接触を通して短期間に集中して多様な価値観に触れる機会が設けられていること。
- 派遣先機関と連携し、担当教員が参加学生の危機管理に配慮しながら研修を実施すること。

2)開発における実践面での留意点

上記以外にも、プログラムを開発するにあたり、より細かく、実践面での確認事項を取り決めていきます。担当教員は、これらの一つずつ潰しながら準備を進めます。

- テーマに沿った講義・セミナー、語学・文化研修、フィールドワーク／フィールドトリップ、現地学生・地域住民との交流がバランスよく取り入れられていることを確認する。
- 派遣先機関とプログラム開発における役割分担を決める（例：週末のフィールドトリップ、宿泊施設の予約）
- 現地研修についてやり取りする窓口（教職員）を特定し、常に連絡が取れる状態にしておく。
- 事前に本学の予算を先方に伝える。また、キャンセル規定や期限についても確認する。プログラム費に含まれる費用項目は、講義、セミナーなど学習に関連した活動、フィールドワーク、フィールドトリップ等の学習テーマに関連した活動（移動費含む）で空港・宿舎間、宿舎・研修先間の送迎、宿泊費、飲食にかかる費用、課外の遊興費は含まれない。研修先が大学の支援・サービスの一環として費用を負担する場合は例外が認められる場合もある。
- 現地での移動方法、移動にかかる時間、訪問予定場所、交通手段、交通費、宿泊場所を下見するなどして確認しておく。

- プログラム開発のため、現地を訪問する際は、事前に監督者、および実施責任者に相談すること。また、事前の現地訪問は、原則1回とする。
- 学生負担費用については、なるべく正確な金額を試算する。
- 学生の旅行の手配は全て実務担当が行うが、教員の旅行手配も依頼可能である。担当教員の出張手続きや支払い等は、通常の海外出張と同様に別途行う。
- 実務担当は、少なくとも事前研修の2回目までに、旅程、宿泊先、費用等の情報を学生に伝え、振り込み先・方法の案内をするための準備をする。一度に全額を用意できない学生もいるので、情報はなるべく早く開示する。
- 学生は大学指定の海外旅行保険に加入。教員も同じ保険に加入する（費用は大学の規定により自己負担となる）。
- 宿泊先手配については施設によって以下の確認を行う。

大学宿舎等

大学寮や大学が特別契約するホテルの場合は現地大学が宿泊費を取りまとめる。実務担当とも相談の上、学生からの費用徴収、および派遣先大学への支払い方法につき詳細を確認する。施設によっては、派遣先大学が立て替え払いを行い、学生から宿泊費を徴収した実務担当(企業)が、大学に費用を送金するケースもあり得る。学生に予め伝えてあるおおよその宿泊費用を上回らないよう留意する。

一般のホテル

予約担当者を予め確認しておく。派遣先大学もしくは担当教員が予約作業を行う場合であっても、学生から費用を徴収しホテルへの支払い作業を行うのは実務担当であるため、予約の移行手続きが円滑に進むようプロセスや時期を確認しておく。事前研修で、宿泊先の情報や部屋割りを伝えておくことと学生が安心するため、ホテルの部屋の設備(トイレ、浴室、キッチン等)、食事提供の有無を確認する。

4.2. プログラムの契約について

FL プログラムの契約は、原則として一プログラムに対し、一機関と執り行うことにしています。派遣先大学との契約書に関わるやり取りは、実務担当者が行い、契約書を留学生課に提出します。プログラムの計画段階において、二機関との契約を要する可能性が判明した場合は、担当教員は、実施責任者を通じ、なるべく迅速に支払い業務を担当する部署（本学では留学生課）に連絡することになっています。その部署は、必要経費、派遣先機関との契約手続き、実務担当との契約等の観点からプログラム計画の妥当性を検討し、実施責任者もしくは担当教員に契約締結の可否を伝えます。可の場合は、担当教員は、実施責任者に、二機関と契約を締結することにより期待されるプログラムの質の向上及び教育効果や、一機関ではプログラムが成立しない事由、危機管理体制および学生の安全性確保の具体的計画を明文化し検討してもらいます。

プログラムの計画は、本学ではグローバルラーニングセンターの中の、短期海外派遣留学を所掌する「派遣（短期）ユニット」で審議し、プログラムが本学のグローバル人材育成目標・計画及び教育方針と合致し、教育上、学生に有益であり、かつ、プログラム実施における危機管理体制に問題がないと判断されれば、開発にゴーサインが出る形になっています。

5. FL プログラムの実施

5.1. プログラム実施年間スケジュール

次に重要なのが、スケジュールです。FL を円滑に実施するために、本学では、以下の年間スケジュール（表4）に基づき、それぞれの担当者が業務を執り行っています。

表4. FL プログラム年間スケジュール

	夏FL	春FL	備考
1月		事前研修	
2月	プログラム開発	事前研修 現地研修	春FL：3月現地研修プログラムの場合は必要に応じて2月にも事前研修を追加で実施可

3月	プログラム確定(研修先、プログラム、費用等)	現地研修	夏FL: 受入先の契約・会計手続きリードタイムを確認。
4月	プログラム説明会実施	事後研修報告会	夏FL: 主に新入生を対象とした海外留学説明会の一環として実施。
5月	プログラム説明会実施 募集開始 契約手続き		夏FL: プログラム別の詳しい紹介を含む説明会を実施。長期休業期間で先方と連絡が取りづらくなる可能性があるため早めに契約手続きを進める。
6月	参加者決定 事前研修		
7月	事前研修		
8月	現地研修	プログラム開発	
9月	現地研修 事後研修	プログラム確定(研修先、プログラム、費用等)	春FL: 学期始めの繁忙期で連絡が滞る可能性があるため早めに手続きを進める。
10月	報告会	プログラム説明会実施	春FL: プログラム別の詳しい紹介を含む説明会を実施。
11月		募集開始 契約手続き	春FL: 長期休業期間で連絡が滞る可能性があるため契約・支払い手続きは、早めに行う。
12月		参加者決定 事前研修	

5.2. 参加者の募集および選考方法

FLプログラムの現地研修開始時期から逆算し、5月(夏FL)と11月(春FL)に参加者を公募します。その約2か月前をめどに、募集要項等の募集に必要な書類を作成する必要があります。実務担当が原案を作成し、実施責任者と連携・調整のうえ、最終案を作成し、短期海外派遣ユニットで確認後、確定しています。各プログラムの特徴を捉えたチラシを作成し、掲示のみならず、学内の伝達フローを活用して各部局に周知するとともに、グローバルラーニングセンターのホームページや各種SNS、また、全学教育の授業や各種国際交流イベント等でも配布・配信しています。つまり、ありとあらゆる広報媒体を使い宣伝します。近年は、SAPもかなり知名度が上がってきましたが、開始から数年間は、「存在を知らなかった」と高学年になってから問い合わせをしてくる学生も

いました。FLはSAPよりも認知されていないため、学生向け説明会は合同開催するようにしています。新しいプログラムを実施するときは、別に説明会を行うよりも、定着していて集客力のある既存のプログラムと合同で行った方が良いでしょう。

募集締め切り日の翌日もしくは翌々日に、実務担当が担当教員に応募書類一式を提出し、担当教員が中心となり、数日以内に候補者を決定しています。その後、FLを所掌する短期派遣留学実施委員会の議を経て、合格者を確定し、実務担当が合格通知を該当学生に送付しています。候補者の選考基準は、プログラムの目的、内容、難易度等を把握している担当教員が予め定められた選考基準に則り行っていますが、その際、専門や教育実践分野の近い他の教員に協力を仰ぐこともあります。例えば、スペイン・プログラムでは、担当教員が全学教育でスペイン語を担当する他部局の同僚と協議し、選考にあたるなど、複眼的に審査を行っています。

5.3. 研修内容と留意

次に、海外の派遣先で行う現地研修と、数ヶ月にわたり東北大学で実施する事前・事後研修について時系列に紹介します。

1) 事前研修

現地研修の学習効果を最大化するために、学生各自（グループで学習する場合はチーム単位）に課題に沿った予習を促しています。本学の留学生や現地学生との事前交流を奨励し、現地研修に向けたレディネスを高める活動を入れることがポイントとなります。例えば、筆者が担当するドイツ・プログラムでは、テーマの「移民」に基づいた課題解決型学習を取り入れているため、初回の事前研修で現地学生とオンラインによる初顔合わせを行っています。2018年度実施のプログラムの場合、4つのサブテーマ「経済」、「政治・政策」、「教育・支援」、「地域」で国をまたいだチーム編成を行い、第2回目の事前研修までに、サブテーマに沿った文献調査や課題整理を実施しています。学生らはそれぞれのチームで

決めた交流媒体 (SNS 等) を用いて課題に取り組みますが、派遣先の大学が Doodle という電子プラットフォームをこちらに共有してくれ、意見交換や資料の共有を行っています。

第 1 回目の事前研修でリーダー、サブリーダーを決めて役割を確認、グループ内、教員との連絡方法を決めておくと、事前研修間にも学習活動の進捗を確認したり、連絡を取ったりしやすくなります。ドイツ・プログラムの場合は、SNS の LINE でグループを作り、E メールと併用するようにしています。E メールでの交流に慣れていない学生もあり、急な連絡は SNS を用いた方が目的を早く遂げることがこれまで多々あったためです。また、実務担当が旅行に関する情報提供を行う機会も事前研修中に15分程度、2 回ほど設け、旅行の手配、海外旅行保険に関する情報、支払い計画・方法を連絡しています。経済的に余裕がある学生ばかりではないため、分割払いをなるべく間隔を空けて行えるよう配慮しています。

2) 現地研修

予めデザインしたプログラムに沿って行いますが、学生を引率し学びや成長のプロセスを援助する担当教員は、以下の役割を特に意識してプログラムを実施するとよいでしょう。

- 学生の安全に配慮しながら、自主性、自発性を重んじ、ファシリテーターに徹する。
- 現地研修中に、学習や活動を振り返るセッションを定期的に設ける。
- インputのみならず、学生にアウトputの機会を設ける。またそれに対して適切なフィードバックを行い、学生が指導・助言のもとにアウトputの質を高められるような学びの場を担保する。
- 担当教員は、学習指導以外にも、スケジュール (変更を含め)、現地での集合時間と集合場所、別行動時の緊急連絡方法などを確認するなど、実務面においても研修が円滑に行われるよう支援する。

3) 事後研修・報告会

事後研修では、事前・現地研修の成果をまとめ最終報告用の資料を作成します。プレゼンテーションの完成度を上げるための練習を促し、担当教員は、必要に応じて適切な指導・助言を行います。報告会では、全研修の成果を学生が発表出来るよう、他のプログラム担当教員とも話し合い、発表方法や時間配分等を決め、予め学生に伝えるとともに、当日は学習成果を評価・確認します。

なお、報告会の際に、次年度のFL説明会等で参加者に体験談を伝える担当者を4～5名確保しておくとい良いでしょう。卒業、就職活動、交換留学などで、都合がつかない学生が出てくるので少し多めに協力を依頼し、参加者の成功体験が次年度参加者にも伝わるような仕組みを作っておくと、説明会の時の教員の負担軽減にもつながります。

5.4. 危機管理

現地での危機管理については、派遣先地域に明るい担当教員が派遣先の協力を得ながら実施することが望ましいのですが、大学として、しっかり危機管理に取り組むことも重要です。東北大学では、FLは担当教員がそれぞれ危機管理についてガイダンスをすることになっていますが、必要に応じて、グローバルラーニングセンターがSAP向けに実施している危機管理セミナーやオンライン教材を活用することが出来るようにしてあります。

学生の体調管理も重要です。FL研修前に、インターンシップや旅行等の、他の海外渡航計画を立てる学生もいます。FLの事前研修と重ならないこと、少なくともFL出発の1週間前までには帰国し体調を整えておくよう指導しましょう。筆者が担当するドイツ・プログラムでは、実際に、前日まで東南アジアを旅行していた学生が、高熱を出し、急遽、参加を取りやめる事態となりました。当日のキャンセルだったので、プログラム費、飛行機代、保険料、現地での宿泊代などのほとんどが戻ってきませんでした。それまで取り組んだ事前研修が現地研修につながらず、学生本人も大変なショックを受け、また現地の協力大学や同チーム

のメンバーにも迷惑をかける結果となりました。学生は日頃から授業、課外活動、アルバイトなど、予定を詰め込む生活を送っていることが多いので無理をしがちです。プログラム実施者がこの点に留意し指導にあたることが大切です。十分留意しましょう。

大学で海外渡航における危機管理ガイドラインがあれば、現地研修前に確認しておくことを強くお勧めします。また、学生が加入する大学指定の保険の適用範囲と現地での保険適用可能医療機関を確認しておく必要もあります。学生が病気・怪我等で現地の病院を利用しなければならないときは、担当教員は当該学生に付き添うか、他の学生とともに研修先に残るか、その場の状況を勘案し判断する必要があります。いずれの場合であっても、現地研修先のスタッフの支援をあおぎ、どちらにも教職員が配置されることを確認しておきましょう。

本学の場合、現地での自由行動については、引率教員が学生の安全が十分確保できると判断したケースは認めるようにしています。また、なるべく現地に精通している現地学生等と行動を共にするよう指導し、不測の事故・事件が起こった場合の対応についても、予めガイダンスを徹底するようにしています。学生とすぐに連絡が取れるよう連絡先・方法を確認し、違法薬物、飲酒、とりわけ未成年の飲酒（年齢制限は日本もしくは現地の法令のうち、厳しい方を遵守）については気を付け、学生に注意喚起を行っています。

6. FLプログラム担当教員のフィードバック

次に、FLを実際に担当している教員に対して行ったインタビューをもとに、FLの教育的意義を明らかにし、開発・実施にかかる課題とそれらに対する実践的な解決法を以下にまとめます。

6.1. FL を開発・実施するに至った動機

カナダ	<ul style="list-style-type: none"> ・現在、あまり活発でないカナダの大学との学生交流を活性化させたい ・世界的認知度の高いカナダの学園都市の魅力を日本の学生に知らしめたい ・国際的な学術環境、とりわけバイリンガルが徹底されているカナダで文化、環境、自然、気候変動について学ぶ機会を提供したい ・海外に目を向け自分の可能性や未来を考えるきっかけにして欲しい ・新しい友人との出会いを通して成長して欲しい
アメリカ (モンタナ)	<ul style="list-style-type: none"> ・高度教養教育・学生支援機構のミッションであるグローバルリーダー育成に貢献したい ・異なる文化・言語またモンタナが誇る大自然の中で環境問題に向き合う機会を提供したい
アメリカ (シャーロット)	<ul style="list-style-type: none"> ・自身の業績およびキャリア・アップのために新たな教育活動に着手したい ・アメリカの多様性やサブカルチャーの存在、またリアルなアメリカを学生に知ってもらいたい
スペイン	<ul style="list-style-type: none"> ・東北大学で習得した語学スキルを応用する場を設けたい ・学生がスペインの文化に直接触れる機会をつくりたい ・様々な学習活動を通してスペイン語運用能力を高める機会を提供したい
ドイツ	<ul style="list-style-type: none"> ・米国、豪州を中心に急速に発展し、海外派遣者数の拡大に貢献しているFLの日本への適用に関心があった ・スーパーグローバル大学創成支援事業や本学の中期目標・中期計画で定めた数値目標を達成するためにSAPに次ぐプログラムの開発が急務であった ・ドイツ文化と移民政策に関心があり、プログラムを実施するための人脈があった

6.2. 学習成果

		研修を通した学習成果
カナダ	言語	言語運用能力をドラスティックに上げるには期間が短すぎる。自己の言語レベルを認識し、語学スキルの向上や、より長期の留学に対するモチベーションを高める手段としては有効
	異文化理解	最初からモチベーションは高いが、現地で異文化に触れ、特に自文化を見つめ直す機会につながっている
アメリカ (モンタナ)	言語	現地学生やフィールドワーク先の専門家、また地域住民との交流に対するモチベーションの向上に成長を見る。帰国後の語学学習、また生涯にわたって学ぶ姿勢に好影響を及ぼすことを期待
	異文化理解	グローバルリーダーに不可欠な異文化理解および異文化コミュニケーション力の向上。参加者は日に日に現地の人達とのコミュニケーションに積極的になる
アメリカ (シャーロット)	言語	すでに参加学生の多くが高い語学能力を有しているため、2週間で大きな変化を実感することは難しい。
	異文化理解	大きな変化が確認できる。アメリカの多様性に触れることでステレオタイプの考え方や差別に対する理解を深めている

スペイン	言語	東北大学の初修学国語クラスでは学べない語彙を習得。課外でも積極的にスペイン語を用いて活動するなどモチベーションが向上。帰国後、約1/3の学生がスペイン語統一試験(DELE)を受験し語学学習を継続
	異文化理解	スペインの文化に対して皆、非常にポジティブで、日本との相違点にも関心を示す
ドイツ	言語	英語を用いてプロジェクトや交流を行うため、2週間であっても英語運用能力は向上。英語運用に対する自己効力の伸長も確認
	異文化理解	現地学生との数ヶ月にわたるプロジェクトと、現地での集中的な交流、またフィールドワークを通じた人との出会いによりドイツに対する理解が深化。それ以外でも積極性や行動力に大きな変化あり

6.3. 開発・実施で直面した課題および解決策

	直面した課題		解決策
カナダ	プログラム開発	<ul style="list-style-type: none"> 全て自分1人で開発することに対する負担 派遣先担当者との信頼関係の構築 派遣先担当者とのコミュニケーション 柔軟でない事務体制 	
	実施(引率)	<ul style="list-style-type: none"> 真面目で自己管理の出来る学生ばかりで特に問題なし コミュニケーションや自身の要望を口にすることに消極的な学生が多い 	<ul style="list-style-type: none"> 会話を促すために、頻繁に話しかけたり、冗談で学生の緊張を解いたり、工夫しながら継続して働きかけた
アメリカ(モンタナ)	プログラム開発	<ul style="list-style-type: none"> 学習効果を最大化するための課外学習先の選定と確保 学習コンテンツと文化体験のバランスの維持 派遣先機関・担当者とのプログラムの目標や学習到達目標の共有 	<ul style="list-style-type: none"> 派遣先が予算やマンパワーで問題を抱えていたため、それらに配慮しつつも教育の質の担保など、譲れない部分については毅然とした態度で要望を通じた
	実施(引率)	<ul style="list-style-type: none"> 派遣先の手違いから宿泊施設に支払いがなされておらず到着直後に混乱 	<ul style="list-style-type: none"> 現地で派遣先の担当者に連絡を取り対応を要請

アメリカ (シャーロット)	プログラム 開発	<ul style="list-style-type: none"> ・プログラム実施時期（学生と自身の現地研修希望時期の不一致） ・準備に時間を取られ負担感 ・研究やその他の活動との両立 ・2週間の不在による家族への負担 	
	実施（引率）	<ul style="list-style-type: none"> ・派遣先との関係が良好で連携体制が整備されているため学生がIDカードをホテルに忘れるなどの軽微なトラブルのみ 	<ul style="list-style-type: none"> ・その場で解決できるような問題ばかり
スペイン	プログラム 開発	<ul style="list-style-type: none"> ・常に最適のコンテンツで学生の学びを支援するためきめ細やかな学習成果モニタリングを実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・現地研修の内容をクラス参観や学生のフィードバックに基づき改善を提案 ・現地コーディネーターが協力的なので常に相談
	実施（引率）	<ul style="list-style-type: none"> ・自由時間における学生の危機管理 ・病人・怪我人が出たときの対応、とりわけ医療施設への帯同に伴う現場離脱 	
ドイツ	プログラム 開発	<ul style="list-style-type: none"> ・派遣先の担当者の専門が経済学であるためカリキュラム、国際共修活動、課題等に対し共通理解を得るのが困難 ・複数の都市を移動するため、宿泊先の確保が困難 	<ul style="list-style-type: none"> ・担当者との価値観やティーチングスタイルの相違を理解・受容しつつ、重要な部分は譲歩せず忍耐強く話し合う
	実施（引率）	<ul style="list-style-type: none"> ・派遣先での予定が変わることに対する学生の不満 ・メリハリのない学習習慣を日本から持ち込み、明け方まで課題に取り組む学生が続出 	<ul style="list-style-type: none"> ・状況に合わせて臨機応変に対応する柔軟性も国際人に必要な資質であることを、渡航前に伝える ・現地研修での負担を軽減するため事前研修の内容を充実化

各プログラムの担当教員により、FLの開発・実施を決めた理由（動機）は様々です。また、当然のことながら、教員の視点で捉えた学習成果や、プログラムの開発および実施にあたり直面した課題も異なります。課題の中には、対策案がまだ見つかっていないものもありますが、多くは、担当教員と派遣先機関の担当者の協働により解決できています。FLに関わる教職員間でコミュニケーションの機会をなるべく多く設け、まずは話し合うという姿勢が大切です。

7. おわりに

SAP に次ぐプログラムとして開発を進めてきた FL により、海外研修参加者は増加しました。また、FL の参加を機に、より長期の交換留学に踏み出す学生も散見され、プログラムとしては一定の成果を上げていることが確認できます。しかしながら、実際の業務において、これまでとは異なる民間企業の登用や、プログラム開発および引率経験の少ない教員との連携が必ずしも全て機能しているとは言えない状況であることも否めません。例えば、上記でプログラム担当教員が言及した業務負担や危機管理体制については、今後、早急に対応しなければならない重要課題です。FL 導入にあたり、グローバルラーニングセンター主導で FL のモデル・プログラムを開発・実施し、そのノウハウを他部署、他部局にも広めることを前提としました。しかし、プログラム担当教員に対する支援の強化なしに普及は進まないでしょう。

ではなぜ、FL を実施するのか。ドイツ・プログラムに関しては、苦勞に値する成果がその答えだと言えます。事前・現地・事後研修の全ての学びのプロセスにおいて、学生は大きく成長します。様々な問題に遭遇し、葛藤しながらそれらを乗り越え、言語や文化背景の異なる学生と自発的に意思疎通を図り、協働する力を身につける。この変化を目の当たりにしながら、彼らの成長を支えることに教育的意義を感じるためです。前掲の FL 担当者も同様に、未来の FL 担当者に向けたメッセージの中で次のように FL の意義に言及しています。

Creating a Faculty-Led Program from scratch is a labor-intensive process. It requires a clear vision of your learning outcome and a lot of communication and patience with the host institution. Furthermore, chaperoning as many as twenty students abroad is a serious responsibility. Constantly throughout the two or so weeks, you will be confronted with and dealing with unexpected circumstances while always being aware of the students' physical and mental well-beings.

However, you will also be able to connect with each member in your group and watch their growth. I firmly believe that creating this opportunity for students will help them develop their global perspective and motivate them to become stronger members of the global community. If even one of the participants uses this experience as motivation to become a future global leader, then it is 100% worth the effort!

It's a lot of work and can be overwhelming at times but it's a very rewarding experience at all levels. The satisfaction of seeing a group of young students experience for the first time a new reality and grow, if only a little, in a positive manner is great. The conceptualization, planning, preparation, organization, the adventure and interactions with the students provides a unique multi-faceted experience that demands a lot but also provides a lot of satisfaction.

今後は、FLにおける学生の学びや成長、つまり、学習成果に焦点を当てた検証を進め、プログラム担当者や参加学生の「肌感覚」でないFLの効果を明らかにし、FLの教育的意義を追求しながら、プログラムの拡充に努めたいと思います。